● 沖　縄

上　地　隆　裕

COVID19の勢いは終息どころか，依然として行先の不透明なままの１年であった。

が，本県の楽壇では，二つの歴史的出来事が実現し，関係者に大きな勇気を与えたことは特筆大書すべきである。

その一つは，琉球交響楽団（音楽監督：大友直人）がプロフェッショナルとして公認されたこと，そしてもう一つは本格的な「演奏芸術センターの竣工」(正式名称は「なはーと芸術劇場」＝NahaArt命名の由来は，設置場所の「那覇NAHA市」と「ART=芸術」をくっつけたもの)。

いずれも本県にとって積年の願いが実現したものであり，これからは世界に向かって「沖縄にグローバルなアンサンブルと演奏会場が存在する」ことが可能となった。これで当県も世界に向かって「人類の宝」＝職業シンフォニー・オーケストラを有する場所，と宣言する権利を得たわけだ。

が，そこで話は終わりではない。オーケストラを得た以上，今度はそれを保護育成する義務が待っている。しかもその仕事は，本惑星が続く限りやり続けねばならないものである。

大言壮語するわけではないが，「文化上等国」の人間なら，これまで世界中へ出かけてオーケストラを聴きまくり，その管理運営者との対話を通じて筆者が得た考え，否思想である。（個人的にも，自らの生活の拠点を置く場で活動する楽団の「定期会員になること」が夢であった）が，今やその目標も叶い，これからは楽団のサポーターの一人として，古今の名作,大作の数々を楽しみながら余生を送りたい。

さて前置きが長くなったが，二年前から流行しているCOVID19の影響と必死に闘いながら，本県楽壇の全ジャンルは全力Fightで戦い抜いている。以下のリポートはその活動内容の全てではないが，その一端を示す「特筆すべき」内容を持つものだ。読者にはいわばエキスの部分だけを拾い上げた報告だと理解して欲しい。

それでは例によって，大まかに分野別（管弦楽，器楽独奏，声楽，合唱，外来公演，国内外の主導的演奏家による公演，県出身者の活躍）に報告を展開して行こう。

有料公演数は本島，全離島も含めて約45公演。その中の最初の管弦楽の分野では，本年が沖縄にとって「特別な記念年」（施政権返還50年記念＝いわゆる「復帰50年」）なので，更に冒頭の琉響本土初公演，本格的なコンサート・ホールの開場も合わさり，同ホールでの各種アンサンブルの活躍が目立った。（NHK響，読売響，そして琉響が二回の定期に加え，「アジア・オーケストラ･ウィーク」に創立後初の招待公演を実現＝するなど，本県の演奏芸術史の巨大な足跡を残した。）ただ残念だったのは，琉球フィル，沖縄響などの活躍が，コロナのせいで低調だった（外来公演はゼロ）ことである。（ユース・オーケストラの動きも同様だった）

続く器楽独奏面は，県勢では上里友二（読売響所属・本県出身），宇根康一郎（九響首席クラリネット・同），上間善之（ホルン）が活躍。声楽ではまず仲本博貴（Br），田里直樹（Tn），喜納響（Br）ら男性陣，および声楽では砂川涼子（Sp）が抜群の存在感を示し，ついで県内でオペラの普及活動に執念を燃やす黒島真季子（Sp）の活躍が目立った。

なお特筆しておきたいのは，宮古島市出身の砂川のことで，彼女は今や我が国を代表する歌手に成長しており，それに相応しい堂々たる歌唱を聴かせた。

合唱では池辺晋一郎が80人のクワイアを率い，自作の「沖縄は叫ぶ」（混声合唱組曲）を紹介，同時に本県の合唱界に大きな刺激を与えた。

本県の楽壇に影響を与えた面々には，上地さくら（Vc）と芙実（Vn）（拠点は東京＝TVと映画音楽の分野で次々と話題作の演奏指導や音楽監督を務めた）姉妹，「葵トリオ」の秋元孝介Pf)，梶川真歩（N響Fl)，碓井俊樹（Pf)，萩森英明（作曲)，そして指揮者の佐渡裕らが挙げられる。

今シーズンの総括は，「全体的には低調に推移，だが得るものも多かった」，である。